

親の過干渉、過期待の病理

日英米の比較に見る親子関係の歪み

伊藤 太郎

Comparative Study of Parents' Excessive Meddling and Expectation on Their Children in Japanese, British and American Families

Taro ITO

1. はじめに：「巣立ちの病」

一人前の社会人になるまでの、いわゆるモラトリアムとしての青年期の延長が叫ばれて久しいが、とりわけ現在ではその傾向に拍車がかかり、精神的な自立を逡巡する若者が増えている。さまざまな青少年をめぐる問題行動や病理現象は、実は今に始まったことではない。不登校や家庭内暴力は、経済の高度成長期が始まり核家族化現象が本格化した頃、つまり男女の住み分けが加速化して父親の存在感が急速に家庭から消えてなくなった昭和30年代後半から大きな社会問題として浮上し今日に至っている。以後時代を追うように、拒食・過食の摂食障害、スチューデント・アパシー（学生無気力症候群）などの問題が浮上し、いじめ、学級崩壊、少年非行などを経て、現在は引きこもり、NEETの若者が大きく取り上げられている。フリーター、ストーカー、おたく、パラサイト・シングルなども、若者の病的な精神状況を紐解く際に鍵になる社会現象であろう。

最近の日本の若者の心性には二極化の傾向が見られる。¹ 一つは、自己抑制心が乏しく、攻撃衝動を露にして反社会的な非行に走る若者が急激に増加していることである。彼らは現代の欲望消費社会の病理性をそのまま体現しているグループと形容して良いかも知れない。非行や犯罪に走らないまでも、攻撃性を常に周囲に向けて問題行動を繰り返すボーダーラインの一群がこの範疇の中核に位置する。もう一つは、大人しいが孤立傾向が強く、対人関係に弱い、ちょっとした葛藤・挫折で傷つく、心を許せる同性の親友がいない（か、極端に少ない）といった内向的な引きこもりタイプの一群である。彼らは知的な面と感情面がアンバランスで、成績は良いが感情面で稚拙な場合が多く、対人恐怖的な症状を進行させて、時に神経症的な触れ合い恐怖・雑談恐怖・会食恐怖などを秘めている場合がある。これらいずれのグループの若者たちにも共通するのは、生きることに自信がない、雑草の逞しさが無い、内面でのプライドは極めて強い、甘え感情を内に秘めている、衝動性や攻撃性を鬱積させているということだ。

この拙稿で主に取り上げたいのは、内向的な引きこもり型の若者であるが、なぜこのような内向的、自信喪失、未成熟型の若者が増えているのであろうか。社会的・文化的要因としては、先ず何よりも偏差値重視の学歴競争社会が、知性偏重の風潮を強め、成績に一喜一憂する頭でっかちの勉強虫予備軍ばかりを生み出している今日の状況がある。教育熱が過熱する首都圏では、有名私立幼稚園の「お受験」に親が徹夜をして並び、子のみならず親のIQ試験が課される昨今である。幼い時からの教育投資の可否が愛するわが子の将来を決するとあって、子どもは就学

前から才能開発の塾通いで忙しすぎる日々を送られる。小学校から中高時代にかけてこそ友だちの存在意義が大きく、何気ない友との触れ合いや摩擦の中で自己主張やわがままの許される範囲を試行錯誤して学びながら、対人距離の取り方を体得していく。友との時間や秘密の共有が「親離れ」のきっかけになるのに、彼らは一様に勉強中心の生活を強いられて受験に向かい、みんなが競争相手という孤立した緊張状態の中でストレスばかりを内攻させる。友作りが一番大切な時期にそれが封印され(後回しにされ)人間関係を取り結ぶ基礎訓練が疎かにされてしまう。

少子化の進行も大人になりきれない若者を生み出す大きな要因になっている。少子化で「少なく生んで大事に育てる」風潮が強まるにつれて、過保護・過干渉・過期待が家庭内での日常的風景になってしまった。家庭を取り仕切り、子どもの養育を一手に引き受ける母親がいつしか見事な教育ママに変身し、教育環境を整えることを自分の使命と思い込み、子どもとの二人三脚で受験戦争に立ち向かう。いつしか父親よりも子どもが大切にされ、母親の庇護のもと純粹培養されたひ弱な子どもが幼児的万能感を持ったまま大きくなるという図式だ。地域コミュニティが消滅し、遊びの場がなくなったこともこれに拍車をかける。年齢の違う近所の子もたちとの遊びが社会ルールの学習に果たす役割が大きかったのに、いまはそれを望むべくもない。子どもはますます家にこもり一人遊びのテレビゲームに熱中するうちに、遊びを通しての人間関係の楽しさも難しさも知らずに育ってしまう。

父親不在型の家庭が増えるのと平行して、社会全体も父性性を喪失し、男性的な判断機能やロゴス機能が麻痺しつつある時代になったという感が否めない。父性の権威喪失は家庭問題に留まらず、日本全体の大きな社会問題として浮上している。判断機能とロゴス機能を担った父性性は、子どもに善悪の別を理で教え、理想と現実を語り、歩むべき方向を指し示し、己の行動と欲望をコントロールすることを教えることが使命である。困難や苦痛や誘惑に遭っても、たじろがずにそれに立ち向かい克服しようとする姿勢を身を以って教えなければならないものだった。しかし今日の日本社会にこのような強い父性的リーダーシップのモデルが欠けていることは明らかだろう。この父性の権威喪失現象は、現代が物欲・所有欲・性欲のような様々な欲望や欲求衝動が喚起され容認される欲望刺激型の消費社会となったことと不可分である。

モノが豊かになり、人がモノに執着し、金儲けに奔走するようになると、必然、人の心も貧しくなるのは必定である。人間性よりも、モノを買い集める金力が物を言う時代になった。高級ブランド品で身を固めて、それで中身も高級な存在になったと錯覚する大人が大勢を占めるようになっている。モノが人間関係に介在するようになり、カネにまかせて高価なプレゼントを贈ることで十分に子を愛していると錯覚する親が増えている。若者の間では趣味優先の生活に潜行するおたく族が増え、またパラサイト・シングルとして親元に寄生する独身貴族も増える。「子どものために」という規範²が色濃い日本の土壌がそれを許容する。親世代も子ども世代と同様に消費社会を満喫しているので、謙虚さや誠実さ、忍耐力や自制心、共感性や助け合いの精神といった心の在り方を教えることが憚られる。親も教師も、自信を持って人生の指針となるべき規範や人としての在り方を示せない。家でも学校でもしっかりと子どもの躰ができなくなり、道徳は死語に近いものとさえなっている。

「一億総中流化」という言葉は懐かしいが、そもそも社会全体が若者にモラトリアムを許すほどに豊かになって、引きこもりやNEETの若者を抱えることができているということだろう。しかし、現代の日本は年功序列や終身雇用が当然のこととされていたかつての高度経済成長期の社会ではなく、熾烈な実力競争を強いられ、果てはいつリストラの憂き目を見るかも知れな

いサラリーマン受難の社会でもある。時代そのものの閉塞感も若者から立身出世の夢を奪う。だから、世間体を気にする心理的呪縛からも解放されている若者は、辛いだけのサラリーマン生活を敬遠し、ほどほどの収入が得られるアルバイト生活に逃避を図る。義務と責任が付いて回る会社人間にならなくとも、フリーターとして何とか日々の生活を送る収入が得られるサービス業全盛の豊かな社会になったのだ。昔は徒弟制度で一定期間の辛い修行を積んでから、ようやく一人前の職人や商売人としての独立が保障された。その際には社会人としての人間的成熟も要求された。ところが現代は、その肝心の人間的成熟がさほど問題とされない。何よりも、現代は大人と子どもの境界が不鮮明なボーダーレスの時代でもある。未熟さを引きずった子どもおとな(おとな子ども)が、地平が見えない状況下、群れを成して巷を徘徊する時代なのだ。

2. 母子癒着の日本の文脈

様々な「巣立ちの病」を生み出す要因として、既述した社会的・文化的要因もさることながら、家庭内の親子関係の歪みの問題が大きいことを述べておきたい。とりわけすべての現象に共通する因子として「母子癒着」をキーワードとして強調したい。フロイト派の精神分析の言葉を使えば、会話も歩行も可能になってくる1歳過ぎから3歳くらいまでの肛門期(自律期)にトイレット・トレーニングが開始される。この時期は、自分の身体を自分の意志でコントロールする自律性の獲得が達成課題となるが、あくまでこの肛門期における自律性は、子ども一人の力でなされる自立性ではなく、母親の支援と管理の下で行われる。失敗が繰り返された後、排泄が然るべき時と場所でうまく行われると、大いに賞賛されて子ども心に自信と誇りが植え付けられる。母親に褒めて欲しい一心で頑張る期待に沿おうとする他人志向性も育まれる。

今日の学歴競争社会の日本では、この自律性獲得の肛門期が思春期を越えて大学受験を控えた青年期の始まる頃まで延長していることが問題になる。熾烈な受験戦争が生活全般にわたる母親コントロールに拍車をかけ、リモコン・ロボットのように学業中心の生活を送るうちに去勢されて、ママご自慢の「よい子」が出来上がる仕組みだ。この「良い子」の実体とは、良くも悪くも人目を気にするために細事にこだわり、自発性や積極性の乏しい、黙々と知識を積み上げるがり勉タイプであるということだ。柔軟性がなく、几帳面で神経質な完璧主義者が多い。いわゆる強迫的 성격者の出来上がりである。しかし問題は、彼らは内面的には小心翼翼として万事に自信が持てない傾向が強く、これが生きる逞しさの欠如やありのままの自分を受け入れる自己受容性の欠如の遠因となって禍根を残すことになる。管理主義と偏差値にがんじがらめの学校現場も、生徒の個性の芽をつみ、受身で従順な、大人しくて真面目な児童・生徒を評価する傾向にあることは事実だろう。

日本的な母子癒着を許す土壌として、とりわけ父親の不在が大きな問題として背景に控えていることは言うまでもない。父親が社会性を体現して育児参加をしなければいけないのが、2・3歳から6歳頃の男根期(エディプス期)である。子どもはこの時期に自立衝動を示し始めるが、反抗をしない大人しい子や良い子の方がむしろ問題性を孕む。「勉強虫」はこの第一次反抗期のみならず、本来あるべき思春期の第二次反抗期もないほどである。男根期の達成課題はエディプス・コンプレックスの克服と超自我の形成である。異性の親に性愛感情を抱き、同性の親に対しては敵意やライバル心を抱くエディプス・コンプレックスは、去勢不安によって抑圧されるが、男児ならば自分よりも大きくて強い父親によって罰せられるという去勢不安によって母親の独り占めを断念し、お母さんはやっぱりお父さんのものと白旗を揚げる。そして、逞しい

父親に屈服し、逆に父親を理想化し同一化しようとする、その方向転換(気持ちの切り替え)こそが大切である。男性モデルとしての父親の強さや逞しさを取り入れて、自分も男らしい人間になりたいと思うことが大切で、その内在化された父親像が男児の性的同一性獲得の上で大きな役割を果たす。もう一つの課題は超自我の形成で、親の持つ社会規範・倫理観・良心などを自我に取り入れる。子どもは成長するにつれて、いちいち親に指図や禁止をされなくても、親によって内在化された社会性である超自我を拠り所に、社会のルールを踏み外すことなく自己コントロールができるようになるのである。

ところがこのエディプス期に、父親が切断・裁断機能を発揮して、母親と子どもの共生カプセルに割り込んでその血の絆を断ち切らないので、子どもはいつまでも母親の懐の中に留まったまま社会化の一步が踏み出せないことになる。これが日本の父親不在型家庭の憂うべき現状である。母の居る家庭から外の世界に、川遊び、昆虫採集、ボール蹴り、サイクリング、キャンプ、自然観察などの様々な名目で連れ出し、身体を活発に動かして自然と戯れ遊ぶ喜びを教えるのが父親の役目であるはずなのに、自覚なく子の育児や教育を妻に任せきりの仕事優先の父親、或いはいたってだらしない父親像が報告される。「一家の中での父親の存在感は薄い。妻が父親の役割も代行していて、事実上夫は子どもと同列になって、子どもと競争して妻に甘えている」実情がある。³ 人間関係の基本は<父・母・自分>の三角関係に始まるが、邪魔者である父親の存在を通して母親の愛情を独占することが不可能であることを知り、また「人間関係はままならぬもの」という諦めや悟りを持つに至る。試練の三人状況を卒業するということは、つまり、自己中心性、我が儘、独占欲、妬み、猜疑心、幼児性などから脱却することと同義であって、来るべき学童期を迎えるまでには達成しておかねばならない前提条件となる。父親に屈服し、受け容れ、同一化する儀式を経ないと(つまりエディプス葛藤を克服しないと)、男性性になじめず、社会化が果たせず、大人の言うこと(=教育)を受け容れられず、同性・同年齢の子ども同士の間で競争が待つ学童期にうまく入っていけないことになる。日本的な父親不在型の家庭から不登校児や触れ合い恐怖的な神経症を呈する子どもが生まれやすい所以である。引きこもりやNEETの若者の問題も結局はここに端を発するのだ。

3. 『息子と恋人』

「巣立ちの病」に苦しむ最近の日本の若者をめぐる社会的状況を俯瞰し、またその主要因としての親子関係の病理、とりわけ母子癒着に至るプロセスとその構造を日本の文脈の中で考察したが、この母子癒着の問題は、実は、「甘えの構造」が特徴とされる日本の親子の専売特許ではない。古今東西、普遍的に見られる人類共通のテーマと断言しても良さそうである。英米文学の中から親子関係の歪みをテーマとして内包する作品を幾つか取り上げて、日本との対比を念頭に置きながら、共通要素、異質要素を検証してみたい。

20世紀を代表するイギリス作家のD.H.ロレンス(David Herbert Lawrence, 1885-1930)原作の『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913)は、ロレンス自身の親子関係の自伝的要素が色濃く反映されている作品である。夫婦の不和と離反が原因で、夫を見限った母親が生きがいを息子たちに託す物語は、まさしくロレンス自身の両親の実話だった。主人公ボールの父親のモデルは仕事熱心だが、遊び好き、酒好きで粗野な炭鉱夫。一方の母親のガートルードは中産階級出身で自尊心と道徳心が人一倍強く、禁欲的で、誰にも譲らない気の強さがあり、思索と読書が趣味の知の女性。結婚当初の蜜月が過ぎれば、階級も性格も違う二人が、いずれ反目し

合い憎しみ合うことは必定だった。倫理意識の強い妻は、夫はこうあるべきという潔癖主義的な規範や義務感を押し付け、彼を気高い人間に改造しようとしたが無駄だった。モレルはことごとく妻に反発し、不満を爆発させ、腹いせに子どもに当たった。彼は酒で仕事に穴を開けることはなかったが稼ぎが少ないので、子どもの数が増えると生活がますます困窮した。ガートルードは貧困と屈辱の生活に生き埋めにされている被害感を募らせながらも、母親としての役割を完璧に果たして子どもたちを慈しみ育てた。結果的に子どもたちを巧妙に洗脳して味方に引き入れ、夫のモレルをひとり蚊帳の外に追い出すことになったが、彼女にすれば、それは社会や夫から家庭を守るための命がけの戦いだった。息子たちは母に暴力をふるう父親を激しく憎み、そして拒絶した。

利発で成績優秀な長男のウィリアムは母親思いの優しい息子になったが、派手で官能的なところが父親似で、活発な猪突猛進の性格。弟のポールは人見知りが激しく、内向的で神経質な芸術家タイプ。ウィリアムは母親とは正反対の肉感的・情熱的な娘と恋に落ちる強硬手段で、無意識にも母親への固着を断ち切って飛び立とうとしたが、時期尚早、失速状態に陥ってロンドンで病死した。期待をかけた長男の死は、母親を悲しみと落胆の底へ突き落とした。長男に代わって中産階級への夢を託された次男のポールは、職場での地歩を固め順調に出世階段を上り始めた。母親の期待と執着が日増しに強くなった。彼の順調な出世で、彼女の願いは成就し、それまでの苦勞と努力が報われるかに見えた。

しかしポールと恋人のミリアムとの恋愛関係が進展するにつれて、母子の間に摩擦が生じるようになった。帰りの遅い息子に怒りを露わにしながら、母親は精一杯の皮肉を言った。期待の星だった長男が女に騙されて無念の死を遂げ、またもや次男までが他の女に取られてしまうという恐怖感にモレル夫人の心は震撼した。ポールは母親とミリアムの間で心が二つに引き裂かれる思いがして心を痛み、母親を苦しませる張本人のミリアムを心底憎んでわざと辛く当たったが、普段の冷静さを忘れて嫉妬に狂う母親にも辟易した。しかし「ミリアムはどうしても嫌なの。あの人はあなたを全部取ってしまって、私には何も残してくれないの。それに、私は本当の夫を持ったことがないのよ」⁴という母親の訴えにポールは金縛りになってしまった。世代境界を越えるこの言葉は母親としては口にしてはならない禁断の台詞で、母親の怨念が乗り移って、息子の健全な心を機能不全の麻痺状態に追いやる結果となった。

ポールは自分が母親にとって命そのものの存在になっていること、また逆に自分にとって母親の存在は「生活の軸であり中心」であり、母親への愛情が「これまでの人生の中で最も強い絆」⁵であることを痛感した。世界で一箇所だけ消えてなくなならない確固たる場所は母親の居る所だった。他の人間は影のように実体のない、どうでもよい存在となって消失する感じだった。ポールは、女中を雇っていつまでも母親と二人で住むことを夢見た。母親が生きている間は、自分に相応しい女には会えないし、誰も愛することはできないだろうと確信した。魂を母親に預けたまま、暫くクララという人妻と情欲関係に陥ったが長続きはしなかった。二人の若い女性は、彼が命ほど大切な母親と引き換えにしてまで獲得する価値はなかった。いや、彼の結婚の意志を阻害する程に母親がポールの心深くに巣くっていたと言うべきかも知れない。母親の死を看取るために、ポールは結局ミリアムともクララとも別れたが、賢明な母親が最後には問題の所在を自ら悟り、従容と身を引いて死におもむく気配を見せたことがせめてもの救いだった。

両性具有という束の間の全能感を母親に与える息子の存在は、すべての母親にとって特別な愛着を感じさせるものらしい。手塩にかけて育てた息子に自分の果たせぬ夢を託すうちに、い

つしか一心同体の共生感情の絆で結ばれて、息子は心の恋人と呼べるような存在になる。モレル夫人の場合は夫への失望感と嫌悪感が激しかっただけに、余計にポールを夫代理の愛情対象にするという過ちを犯すことになった。夫婦間に円満な愛情関係が維持されていれば、母親は夫の愛情エネルギーの補給を受けて、余裕を持って育児に向かう母性愛の原動力に転化できるのだが、家庭人失格の烙印を押された性格破綻者のモレルに、夫としての、父親としての機能を期待するべくもなかった。モレル夫人にとっては生活のすべては忌むべき夫から子どもたちと家を守る戦いの連続だった。男尊女卑のヴィクトリア朝の父権制社会では、妻は従順で慎み深い家庭内天使として育児と家事に勤しむことが強いられ、夫の庇護の下、経済的・精神的自立を阻まれ続けてきた。その意味では、自負心と階級意識の強さが問題点として指摘されるモレル夫人ではあったが、時代の制約の中で必至に戦い、子どもの存在を通してしか自己実現できなかった女性の弱さと哀れさを感じざるを得ない。

4. 『ジム・スカーフィデイルの屈辱』

イギリスは日本的な母子共生カプセルが成立しやすい土壤があるようで、アラン・シリトー(Alan Sillitoe, 1928 - 作)の『ジム・スカーフィデイルの屈辱』(*The Disgrace of Jim Scarfedale*, 1959)になると、母子癒着の構図がさらに一段と深刻化し、母親と子どもをめぐる状況は救いようのない悲劇の様相を帯びてしまう。時空を越えて、現在の日本にあっても少しもおかしくない悲惨な現実味を覚えさせる。舞台は第二次大戦下のロンドン。主人公はジムという27歳の若者と同じ下町長屋に住む「ぼく」という少年が、母親のエネルギーに呑み込まれて自立ができないジムのことを読者に症例報告する一人称小説の体裁を取る。ジムの父親は彼が生まれて直ぐに病死。母親が近くの工場で身を粉にして働き、女手一つで立派に育て上げる。配給制の食糧難にもかかわらず、母親は精一杯のものを用意して彼に食べさせたが、当時13歳の「ぼく」と27歳のジムは同じ体格だった。目が悪かったこともあり、小柄で病弱だったジムは兵役を免れて母親は安堵した。ジムは母親の紐に繋がれたままの、気の弱い、従順でおとなしいマザコン・ボーイだったので、腕白坊主ばかりが揃う下町ではかえって目立った存在となって、好奇の衆目を集める結果となった。

そのジムが結婚すると宣言してみなを驚かせた。彼が結婚できないことを誰よりも知っていた母親には寝耳に水だった。息子のため一筋に尽くしてきた母親をないがしろにして、勝手に結婚を決めるとは卑怯だとひどい剣幕で怒った。しかし今回はジムは簡単に母親に降参しないで初めて反抗の意志を貫いたので、余計にみなを驚かせた。彼が結婚相手に選んだ女性フィリスは、洗練された話し方のできる、落ち着いた物腰の、中産階級出身の女性だった。スカーフィデイル夫人と初めて会った時も堂々とやり合い、彼女の尋問するような鋭い質問にも物怖じせず受け答えをした。負けん気の強い女同士だったので帰り際にはいがみ合いの喧嘩になってしまったので、結局ジムは彼女と結婚するために、母親を捨てて家出同然に姿を消した。

フィリスは母親と同類の女傑的存在で、ジムが母親の懐から飛び立つために無意識に選択した頼りがいのある受け皿だった。成熟した女性の愛情と支えがあれば、母親支配を脱せられると思ったのだろう。フィリスもジムとの結婚に思惑があった。彼女は政治談議が大好きで、いわば労働者の味方を自任する社会主義者の女性闘士の卵だった。代理母の役を買ってジムと結婚したのは、手始めに彼を洗脳することが自らに課せられた社会改革の第一歩となる仕事だと考えたからだ。結婚当初は甲斐甲斐しく彼の身の回りの世話を焼いたフィリスだったが、しか

し彼の教養のなさや受身に向上心のない生活態度に大いに失望して、急速に彼を軽蔑し始めた。家事を一切放棄し、ジムにさんざん皮肉を言い、ののしり、悪態をついた。頭に包帯を巻いて帰省するジムの姿が頻繁に目撃されるようになった。結局彼女は彼を見限り、夢を追ってロンドンに行った。

母親のもとに情けない姿を晒しながら帰った傷心の息子を、母親は満面の笑みで迎えた。喜びの気持ちを抑えながら舌なめずりをする母親に、ジムは犬にも劣る惨めな扱いを受けたこと、髪の毛が逆立つほどの恐怖と屈辱を受けたことを訴えた。これからは食費として週に2ポンド支払い、二度と心配をかけないようにして親孝行に励むことを誓って、同居の許可をもらってからの彼は生涯で一番幸せそうだった。母親も永久に息子を取り戻した安堵感で有頂天だったが、平安は長くは続かなかった。ジムはふさぎ込んで誰とも口を利かなくなり、6ヵ月後にはほとんどまる禿になってしまった。夜毎の不可解な徘徊も始まった。行く先は誰も知らなかったが、2年後に彼が警察に捕まったことで全てが判明した。ジムはバスで遠くまで行き、夜道を歩く少女を襲って乱暴をしていた。彼にそんな破廉恥行為をする根性があったとは信じられなかったが、彼は18ヶ月の刑務所入りを宣告された。出所後に母親と二人で誰も知らない土地に引っ越したので、再びジムを見かけた者はいなかった。「ぼく」に言わせると、あまり長くおふくろのエプロンにぶら下がっているとジムのような救いようがない人間になってしまうのである。

ジムの完璧なまでのマザコン・ボーイにおとしめた要因は、言うまでもなく強大な母親のエネルギーだった。グレートマザーには子どもを慈しみ育てる創造的側面と、強大な愛情エネルギーで呑み込んで子を窒息死させてしまう負の否定的側面の二面性があるが、ジムの母親は典型的な後者タイプだった。しかも彼女の場合は性格的に色々と問題があった。モレル夫人もそうだったが、彼女は家の中をいつもピカピカに磨き上げるのが趣味という潔癖症的な粘着気質者であり、自己中心的に、排他的に、二分法的に物事を裁断しなければ気が済まないという頑固さがあった。女性的な情感や感性よりも、負けず嫌いで、気丈で勝気という男性的要素が目立った。皆に言わせると彼女は「横暴な努力家」で、「私は努力家ですが、しょせん出来が違うので誰よりも一段上にいます」⁹と書かれたプラカードを担いでいるような激しい自負心が鼻についた。戦時下の困窮の時代に二人だけの母子家庭を守るために必死に生きていたことを差し引いても、他人にはいつも批判的スタンスをとって平気で悪口を言うのは、隣近所の反感を買って当然だった。コミュニティとの連帯を忘れて回りの世間を信用しない母親からは、過剰な警戒心だけが子に伝わる。母親が無意識に子に伝える分離不安の構図で、ますます子は母親との共生カプセルに閉じ籠る。

スカーフィデイル夫人の心の奥底には自分の人生を子のために犠牲にしたという思いが潜行して怨念化していたようだ。ジムが結婚したいと言った時に堰を切ったように恨み感情が噴出して「恩知らず」、「親不孝者」、「人でなし」と喚き散らしたのもそのためだった。今日の日本の母親が出産・育児でキャリアを断念させられた思いを怨念化して内攻させ、子どもが母親の手を離れて親離れをする段になって、逆に子にしがみ付き、教育ママに変身して子の成長を生きがいにする図に似ている。子が幼い時は恩着せがましく愛情を出し惜しみ、子離れが必要な段になって子に執着し己の空虚感を埋めようとする。怨念化が理性を曇らせ、子が自分とは別個の存在であることを忘れさせ、母親中心の一体感を手放すまいとさせる。一見、献身的な母親であるかに見え、また母親自身も自分をそのように思い込んでいるから余計に始末が悪い。実は我執のためであるのに、子のためという確信が絶対なので、母親にはまったく反省の色が

ないのだ。

わが子を「二重拘束する母親」⁷がいる。「男子たるもの、いつかは結婚して身を固めるべし」と建前を言うものの、一方ではジムの自立を阻止すべく「お母さんを捨てないで」と本音のメッセージを送り続ける。子が退行的になって依存を続ける限り子に過剰な愛情を注ぎ、子が分離して自立しようとする、愛情を引っ込めて見捨てるぞと脅迫する。愛情を注いでくれる良い母親と、愛情を引っ込める悪い母親を一人の全体的人間として統合して認識できないと、その二つの母親イメージは、それに相応する良い自己と悪い自己に分裂したまま、ちょうどジキル博士とハイド氏のように、子の心の中で内部統一できなくなってしまう。実家に帰ったジムは暫くは大人しくしていたものの、自信喪失の挫折感と屈辱感の中で、性愛感情を伴った自立衝動(母親に認めてもらえない悪い自我)を抑えがたくなり、ついには母親の目の届かない遠くで少女を襲うという歪んだ性欲衝動・攻撃衝動の形で発散する結果になった。悪い自我がハイド氏のように一人歩きを始めて、アクトアウト(行動化)するという自我分裂を呈してしまった。

5. 『木馬を駆る少年』

上記のイギリスの2作品の母親たちは、程度の差こそあれ、母親の過保護、過干渉、過期待を受けているうちに息子が精神的にスポイルされる構図だったが、逆にD.H.ロレンスの後期の短編の『木馬を駆る少年』‘The Rocking-Horse Winner’では、わが子を愛せない母親が登場している。母親のニグレクトが悲劇を生むケースは最近の日本でも増加傾向にあり、母親としての自覚がない、母性愛の欠如した未熟タイプの母親が虐待を引き起こす問題が深刻である。普通の母親であれば多少なりとも我慢を覚え、葛藤やストレスを感じながらもそこそこ子どもを受容して育児に勤しむのだが、未熟な娘性のレベルに留まる若い母親は、自分本位の考え方が改まらず、育児に無関心が放棄・拒否を決め込み、結果として虐待を受けた子どもは非行に走ったり情緒障害に陥ったりする。そもそも母性愛は女性ならば誰しも最初から持っている訳ではない。無心の赤子と柔肌を接するうちに、わが子を慈しみ育て守ろうという情愛がしみじみと内から湧き上がってくるものであるが、家事は無論のこと子育てもすべて乳母や養育係りの子守りに任せるイギリス中産階級の場合は、赤子との愛情交換のキャッチボールの手立てとなるスキンシップを持たない分、果たして情愛に溢れる母性愛が十分に芽生えるのかさえ疑問になる程だ。

主人公のポール少年の家は、生活レベルこそ上流の贅沢さを維持してはいたが、いつも「もっと金が要る」という囁き声が屋敷のどこから聞こえてきて、子どもたちは不安を募らせていた。心優しいポールはその声の主がお金のないことで不満顔を見せる母親だと思い、お金をプレゼントすることで母親の歡心を買って、自分たちへの愛情を取り戻そうと試みる。不思議なことに彼の願いが天に届いたのか、彼が子ども部屋の木馬に一心不乱に乗りながら精神集中をすると、靈感を高めて競馬の勝ち馬を言い当てることができるようになった。靈感を絞りきって最後の大レースの勝ち馬も予想できたので、巨額の配当金を手に入れることができたが、それは彼の命と引き換えの悲しい結末になってしまった。未熟でエゴイスティックな母親の、その虚栄心と金銭欲の犠牲になって、彼は短い人生を終えてしまった。

中産階級の悪しき体質が集約された感がするこの母親は、生来が贅沢で派手好きで、自分の趣味には惜しまずに金をかけ、欲しいものは必ず手に入れていた。虚飾、虚栄の生活習慣にい

わば誇りさえ感じながら、近隣の誰に対しても優越感を覚えていた。未熟な人間ほど足ることを知らずに欲望を滾らせてしまうが、彼女も飽くなき我執に憑かれた金銭亡者と言ってよかった。自分を見つめる反省心もなく、すべてを責任転嫁して他人のせいにしてしまうので、思うがままの贅沢が許されない不幸な貧乏生活も稼ぎの少ない夫のせいにする思いが怨念化して、敏感な子どもの心に伝わってしまったようだ。しかも彼女の致命的欠陥性は、彼女自身が認めているように、母親としての自己犠牲的な愛情が微塵も窺えないところだろう。カネやモノに憑かれた物質主義的な体質が否めず、子を慈しむ人間らしい情愛の心を完全に逸していた。恋愛結婚のはずの夫への愛情もいつしかすっかり消え失せ、愛らしい子どもたちも無理やり自分に押し付けられた存在のように思えた。彼女の心には「誰に対しても愛情を感じるができない硬直化した部分」⁸があったのだ。愛情過多の母親のために自立を逡巡したポール・モレルの場合とは違って、このポール少年の場合は未熟な母親の母性愛欠如のために愛情飢餓に囚われた彼が、母親の愛情を求めようとして心を砕き、命を捧げる悲劇に落ちた。いずれの場合も問題性は母親にあって、被害を被るのはこころ優しい息子の方だった。

6. 『草原の輝き』

アメリカに目を転じると、日本やイギリスと些か趣きが異なる作品が散見する。母子癒着ではなく、父子癒着の病理構造を垣間見せる作品が目につくように思える。アメリカ社会そのものが、母子癒着の病理を引きずって自立が果たせない軟弱ボーイには生存することさえもできないほどの熾烈な男性的競争社会であることが原因だろう。母親と組んで「内にこもる」のではなく、Jr.の息子が父親との男同士の二人三脚で社会に立ち向かいビジネスを展開せざるを得ないという図式だ。ウィリアム・インジ(William Inge, 1913-73)の『草原の輝き』(*Splendor in the Grass*, 1961)は、人間らしい心を忘れ、欲望の膨らんだ父親が、自分勝手な期待を息子にかけ、自分の敷いた人生レールの上を歩ませようとした結果、父子ともども悲劇に陥るという話である。

時代はアメリカ経済がバブルの好景気に沸く1928年、舞台はカンザス州の小さな町という設定。高校3年のバッドとディーニーは同級生もうらやむ程の美男美女の純愛カップル。二人は卒業したら直ぐにでも結婚をしたいと希望するが、石油会社の事業拡大の夢を息子に託しているバッドの父親のエースはそれを許さない。結局、父親思いのバッドは地元の農業短大を卒業してディーニーと二人で牧場経営をする計画を断念し、父親の勤めるエール大学進学を受け入れた。大学さえ卒業すれば二人の結婚を認めて祝福するという父親の言葉を信じた故の決断だった。結局、彼は金持ちの御書司として、温和なa nice boyとしての仮面が脱げないでいた。妊娠騒動を起こして実家に連れ戻されていたバッドの姉、flapperのジニーは、優柔不断の弟が父親の敷いた人生のレールの上を進もうとしているのを知って、父親の言いなりになっていると今に手遅れになると忠告するが、バッドにはその忠告の意味するところが分からなかった。ディーニーと付き合うのを止めて、クラスメートのファニタに暫しの性欲のはけ口を求めながら受験勉強にいそむこととなった。

バッドはエール大学に入学したが、次第に勉学意欲を失いアパシー状態に陥った。父親に言われるがままの動機付けのない進学だったから、当然過ぎる帰結だった。遊興と酒で生活が荒れた末に、成績不良で父親が呼び出されて退学勧告がなされた。「誰もが大学を出る必要はない」と諭す学部長に、父親がまたもやバッドの口を封じながら、卒業だけはさせるからと恫喝する

ように言い放って席を立った。その晩のニューヨークの高級ナイトクラブでの父子和解の場面で、「おまえにしたことは間違いだったかもしれない⁹と率直に非を詫びて謝る父親をバッドは許してやる。しかし父親は、目の前で踊るディーニー似の美人ダンサーをバッドに金であてがうことで、息子から恋人を奪った過去の償いをしようとする。女をモノ扱いする父親に呆れて早々にホテルの自室に退散するバッドだった。モノに支配され、モノに執着し、モノでしか愛情表現ができなくなった父親の、彼らしい償いの仕方だった。翌朝、バッドの部屋をノックしたのは、事業破綻に窮してホテルの窓から投身自殺した父親の死体確認を頼みに来た警官だった。1929年10月の株価大暴落後、マンハッタンはわれ先に競うようにビルから身を投げる自殺者を避けて通るのが難しかったと言われるが、作品的にはその時代性をうまく背景として利用した衝撃の結末だった。

バッドの父親エースは、かつてはのどかだった牧場の経営者だったが、石油井戸を掘り当ててから欲の皮が突っ張ってしまった。野心に燃え事業を拡大し、金儲けに奔走した。町の人々からアメリカンドリームを果たした名士として崇められ、その美酒に酔いしれながら息子に更なる事業拡大の夢を託した。頼りがいのある猪突猛進型の父親だったが、経済活動にいそしむうちに、いつしか温かな人情味や慎ましい謙虚さを忘れ、弱肉強食の競争原理の信奉者と成り果ててしまった。経済的な成功がもたらす絶対的な自信が、彼を傲慢にし、強圧的な人間に変えた。父親にとって、ディーニーは大切な息子をたぶらかし出世階段を踏み外させる悪しき存在に他ならなかった。子どものために親が勝手な人生設計を立て、自分に都合の良いルールを敷いてやるのが、子を慈しむ親の麗しき愛情と錯覚する親が日本でも昨今多いけれども、エースはそんな父親の代表選手だった。しかし有無を言わせぬ過剰な期待で子どもの自由意志を踏みにじることが、いかに大きな重荷となって子の心を萎縮させ、子の人生を狂わせてしまうかに思いが至らない点で、愚かしい父親だったと言わざるを得ない。結局は彼の場合も我執に囚われ、事業の拡大や経済的成功という自分の怨念化した夢を息子に託しただけだった。

このような欲に駆られた父親を生み出す背景として「ジャズ・エイジ」や「アスピリン時代」と呼ばれた1920年代の時代性が大きく作用していた。第一次世界大戦後に一躍資本主義世界の盟主に躍り出たアメリカは、続く20年代に空前の好景気のパブル期を迎えて、物質的繁栄を謳歌した。質素儉約のピューリタニズムは廃れ、人々は金銭欲、物欲、所有欲に憑かれ、浮き足立って欲望充足の衝動に身を任せた。ちょうど日本中が1980年代のパブル経済で湧いた喧騒・狂乱の社会風潮に似ていた。時代や国は異なるけれども、しかし、親が子にける過期待・過干渉の度合いは、利潤追求と効率優先を旨とする商業主義・拝金主義が横行するにつれて深刻化するというのが一般真理のようだ。打算や利害が渦巻く時代性の中で、利己心のままに出世や成功を目指し、金儲け競争に人々がわれ先に参入する。モノやカネが大手を振って巷をのし歩く。得てしてこのような時代状況下では、子どもよりもむしろ大人たちが目先の事柄に目を奪われ、心の余裕を失う。親が自分自身の抱える問題性や抑圧した欲求や怨念感情を未処理のまま、支配的に子どもに向かう。ゆったりと子どもの個性や自主性を尊重して、親離れする子どもをそっと見守る態度を持ってなくなってしまう。

この作品には、父親が勝手に息子の人生ルール敷く問題と同様に、「子離れ」できない母親の過干渉が娘を精神的危機に追いやるテーマが並立している。ディーニーは、失恋の痛手から深刻な不安パニックに陥り2ヶ月の自宅療養をしたが、結局自殺騒ぎを起こして、精神病院に入院した。親に禁じられた最後の一線を越えることの出来ない「良い子」という意味ではふたりは同類だった。彼女は母親から受け継いだ禁欲的な性徳が強く、それまでバッドにはキス

しか許さなかった。慎重で真面目で、自己抑制心が強く、ファニタのように性解放気分溢れる時代風潮に身を任せて自由奔放には振舞えなかったので、このディーニーの性的潔癖傾向にバッドは自分のことを棚に上げてイライラ感を募らせていた訳だ。

療養中のディーニーは、様々な療法を受けながら着実に快方に向かいつつあった。ジョニーという新しい恋人もできた。彼は父親に無理やり外科医の道を進ませられ、最初の手術実習の解剖でメスを持つ手が震えて失態を演じて以来、自信喪失の神経症状を呈して入院していた。担当医との面接の時に、ディーニーは「私の可愛い娘」、「私のベイビー」が口癖の両親が待つ実家には帰りたくないと訴えるが、医師は「親も欠点のある生身の人間であり、最近は何でも親の責任にするが、親も昔は子どもだった」と諭した。医師はまた「恐怖は直視すれば消滅する」¹⁰とフロイト理論を引用して、ジョニーからの求婚を受ける前に、バッドに会って彼への気持ちを確認するべきだと忠告する。退院して一時帰省したディーニーに母親が自分の拘束的だった養育方針を詫げるが、ディーニーは「誰のせいでもない。あなたを愛しています」と優しく応えて、この母娘にも立場逆転の受容と和解が成立。そしてディーニーは医師の忠告通り、町外れの牧場へバッドに会いに行く。彼は大学中退後、すぐにピザハウスの娘と結婚し一児の父親となって、故郷の小さな牧場でわずかな数の牛を飼いながら、昔からの夢を叶えつつあった。彼の変わりように戸惑いながらも、在るがままに今を生きることの大切さを実感して、バッドとの辛い恋愛を青春の良き思い出として心の中に封じ、過去から卒業する決心をするディーニーだった。

7. 『エデンの東』

アメリカの20世紀文学を代表する作家の一人、ジョン・スタインベック(John Steinbeck, 1902-68)作の『エデンの東』(*East of Eden*, 1952)は、旧約聖書のカインとアベルの兄弟間のいさかい(いわゆるカインコンプレックス)を下敷きにした長篇である。その原作を映画化したのが名匠エリア・カザン監督であり、父親に反抗的な弟のキラル役で出演したジェームズ・ディーンの当たり役となった映画としても有名である。この作品も実は父親と息子の一蓮托生の悲劇の問題性を内包している。時代は第一次世界大戦の暗雲が立ち込める1910年代、舞台はカリフォルニア州のサリナスという町で、双子の兄弟のキラルとアロンは、町の名士である厳格な父アダムに男手一つで育てられた。敬虔なクリスチャンで生真面目な性格のアダムは、温厚で誠実な長男のアロンばかりを溺愛し、事あるごとに反抗的な態度を見せる次男のキラルに手を焼いていた。何かと兄弟を比較してアロンばかりを誉める父親に、キラルは自分が愛されていないという思いを募らせていた。彼の愛情飢餓感と孤独感アロンとその恋人アブラとの仲睦まじい光景によってもより深まっていた。

キラルは死んだとばかり聞かされていた母親が、実は父親と自分たちを捨てて出奔し、いま娼館の女経営者として近くの町で生きていることを知る。彼は自分の中に流れる母親の悪の血を感じ、母親への恨み感情と憎悪心を膨らませていた。そんな時アダムが全財産をつぎ込んで野菜の冷凍輸送の事業を始めるが、失敗して多額の損害を被り破産してしまった。父親を経済的苦境から救うことで彼の愛を得ようとしたキラルは、戦争を見込んだ大豆の先物買いで多額な利益を得る。一方、日々戦争色が濃くなっていく中、アロンとの愛に不安を抱いていたアブラは、いつしか、不良っぽい純真で繊細なキラルに心惹かれていた。アダムの誕生日、アロンはアブラとの婚約を発表して父親を喜ばせる。キラルは父親に先物買いで儲けた金をブレイ

ントするが、戦争特需で儲けた汚い金として拒否される。深く傷ついたキアルは絶望し、父親への報われない愛情をアロンへの憎悪に変え、アロンを母親に会わせるという衝動的な復讐行動へ走った。

母親に出会い、母親が娼館の経営者だという現実を知ったアロンは激しい衝撃を受け、狂ったように部屋から飛び出していく。そして彼はそのままアダムたちの手を振りきり、志願兵を乗せた軍隊の輸送列車に乗り込んでしまった。泥酔状態で不気味な笑みを浮かべながら窓ガラスに頭を打ち付けるアロンを見て、ショックのあまりアダムは脳卒中で倒れそのまま半身不随になってしまう。キアルはアダムに救いを請うが、ほとんど意識のないアダムはなにも答えない。耐え難い苦しみと闘いながらもキアルは懸命に父親の看護を続ける。そんなキアルを見守り支え続けるアブラ。そしてクライマックスの場面、アダムはキアルに高慢な看護婦が気に入らないので交代して欲しいと告げる。一瞬耳を疑うキアルだったが、もう一度アダムが彼に看病して欲しいと告げた。感動的な父と息子の和解が一方の悲劇の様相を相殺して余りある結末である。

兄弟の不和、そして兄アロンの出征という悲劇を招いた要因として考えなければいけないのは、父親のアダム自身が抱える問題性である。アダムは清く正しい愛を説く、善良で、品行方正で、敬虔なキリスト教徒であり、常に冷静沉着、公平無私に振舞って人々の信頼と敬愛を集める人物である。さながら自分の善性に絶対的自信を持つ前世紀的な遺物と言っても良い存在だろう。しかし、完璧な人間性を自任する独善的なアダムに、妻は愛想をつかし発砲事件まで起こして家出をした。彼女は元来がキアルのように自由奔放で野性的であり、自分の欲求や感情に素直な性格であり、男性的な活動性や自立志向を持った女性だったが、アダムはそんな彼女の人柄を在るがままに受け入れようとはせずに、自分の価値観や規範意識の中に彼女を閉じ込めようとして、結果的に彼女を窒息させてしまっていた。母親は家出の原因をアダムが彼女を家の中に縛り付けて、愛を独り占めしようとしたからとキアルに言い訳をするが、それは決して彼女が淫乱多情な性悪女だったということでは決してない。気性が激しく現世的な商魂に長けた彼女は、男に付き従う従順さや素直さで家庭を守るだけの人生には飽き足らなかったのである。聖書に登場する従順で信心深い女性の範疇から外れる妻の性格要素をすべて悪と決め付けたアダムにこそ非が認められよう。そもそも人間には善と悪の二面性が並存するものだが、アダムにはその人間的宿命すら受容できなかったということ自体が問題だった。認めたくない自分の悪なる「影」を妻に投影して、妻やキアルを憎むという心理機制こそが問題だった。

キアルの魅力は、本能的で野性的な自然児であり、感受性が強く繊細な反面、社会規範に縛られず、周囲の視線を気にしないで行動するスタンスの自由さがあった。内面はとても純粋で愛情深い子どもだったが、兄のアロンがいつも父親から愛されているのを見せつけられると、兄弟間の対抗意識から何事にも斜に構えて屈折した行動をとるのは必然の結果だった。一見理想的に見える父親のアダムと長男アロンの密着の信頼関係であったが、しかしアロンが父親の期待を一身に受けて、無批判にその価値観や社会規範を受け継いで「良い子」を演じていたのに対して、キアルは父親の仮面に隠れた偽善的本質を探れる目を持っていた。生真面目な分、臨機応変の柔軟性を欠き、自分自身を精神的・道徳的がんじがらめに身動きできない状況に追い込んでいたアロンが、挫折に弱い「良い子」に付いて回る性格の脆弱性の故に、最後に悲劇に落ちてしまったのも納得がいく。親は言うことをよく聞き、自分と性格が似ている子どもを愛するのが常であり、兄弟間に親の愛情をめぐる戦いがあったとしても仕方のない事かも知れないが、親としてはできるだけ公平・平等に子どもを愛するように努めるべきであり、一方

にだけ過剰な期待をかけることは止めなければいけない。ましてや自分の「影」を投影する心理機制で子どもの心性を歪めることがあってはならない。

現代は若者にとって自立の難しい時代である。現代ほど様々な社会的・文化的要因が錯綜して若者の自立を難しくしている時代はないように思える。特に日本の現状を見るにつけその感を強くする。しかし一旦目を内なる家族関係に向けてみると、古今東西、時代や国は違っても、親子関係の歪みが青少年の精神的自立を妨げる大きな要因として作用していることに気付く。しかもその歪みを生じさせる責任が親の側にある場合の多いことに愕然とする。子離れのできない親が自身の勝手な思惑や期待、果たせぬ夢や怨念を未整理のまま子どもに向けてしまい、子どもが親の代わりに犠牲になって心に歪みを生じたり問題性を発現したりする。親世代としては、先ず自らを見つめ内省する必要を強く感じる。

注

1. 町沢静夫『飛べないトンボの心理療法』(PHP、1996) p.16
2. 山田昌弘『パラサイト・シングルの時代』(ちくま新書、1999) p.142
3. 木村栄・馬場謙一『母子癒着---母を拒み、母を求めて』(有斐閣、1988) p.64
4. Lawrence, D.H. *Sons and Lovers*, London: Penguin Books, 1981. p.267
5. Ibid., p.278
6. Sillitoe, Alan, *The Loneliness of the Long Distance Runner and Other Stories*, London: Harper Collons, 1994. p.144
7. ベイトソン(G. Bateson)らが抽出した概念。ベイトソンらによると、将来、統合失調症になる子どもは、母親からの互いに排他的で両立し合わないメッセージに晒されていて、しかもその場から逃れられない状況を強いられる。子どもはそうしても罰せられ、そうしなくても罰せられるという進退窮まる状況の中、相手の真意を量りかねて次第に主体性を失い、自信を失くして行くという。
8. Lawrence, D.H. *The Collected Short Stories, vol* , London: Heinemann, 1976. p.790
9. Inge, William, *Splendor in the Grass*, N.Y: Dramatists Play Service Inc, 1989. p.53
10. Ibid., p.55

参考文献

1. 笠原嘉『アバシー・シンドローム...高学歴社会の青年心理』(岩波書店、1984)
2. 小此木啓吾『モラトリアム人間の心理構造』(中央公論社、1980)
3. 福島章『青年期のカルテ...受験世代の心理と病理』(新曜社、1985)
4. 同『イメージ世代の心を読む...疑似現実はどういう人間を生み出したか』(同、1991)
5. 町沢静夫『成熟できない若者たち』(講談社、1992)
6. 斎藤学『子供の愛し方が分からない親たち』(講談社、1992)
7. 山田和夫『ふれ合い恐怖...子どもを愛せない母親たちと青少年の心理』(芸文社、1992)
8. 同『エロスなき母子癒着の病理』(大和書房、1986)
9. 中野収『「家族する」家族』(有斐閣、1992)
10. 清水将之『青い鳥症候群...偏差値エリート末路』(弘文堂、1989)
11. 奈良林祥『世を病むニッポン...母親の執着が息子をマザフィグ族にする』(主婦の友社、1990)
12. 斎藤環『社会的ひきこもり...終わらない思春期』(PHP、1998)
13. 岡田尊司『子どもの「心の病」を知る』(PHP新書、2005)
14. 小柳晴生『ひきこもる小さな哲学者たちへ』(NHK出版、2002)